

Title	現代における「啓蒙」の論理：人間的自然の再興をめざして(序)
Author(s)	井上, 純一
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.333-p.342
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80484
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現代における「啓蒙」の論理

——人間的自然の再興をめざして——

(序)

井 上 純 一

Die Logik “der Aufklärung” in der Gegenwart

——zur Wiederherstellung der menschlichen Natur——

(Einleitung)

Junichi Inoue

In den Untersuchungen der vorliegenden Arbeit wird eine Grundfrage des gegenwärtigen Zeitalters aufgenommen, von der nicht nur das Schicksal der Humanität, sondern das einer sich noch menschlich nennenden Gesellschaft abhängen wird. Sie ist die Frage nach der Möglichkeit der Verwirklichung der menschlichen Natur.

Haben wir das Aufblühen der menschlichen Natur, die die Aufklärung erwartet hatte, erfahren? Nein, wir haben es nicht erfahren. In der heutigen Gesellschaft—dem staatsmonopolistischen Kapitalismus—schrumpft die menschliche Natur ein, und verfolgt den Weg der Verarmung. “Die menschliche Natur”, die wir auf der Straße alltäglich sehen können, ist eine Art der Mode, und nichts anderes als die Ausblühung der menschlichen Begierde. Die gegenwärtige Zivilisation steht uns als “die zweite Natur” entgegen. Die zweite Natur als ungeheure Organisation zerstört die menschliche Natur und fördert den Prozeß der Verdinglichung.

Wie können wir dieser Situation entgegen, wenn der Zerstörungsprozeß der menschlichen Natur ein gegenwärtiges Kennzeichen ist? Das ist auch das Thema der “Frankfurter Schule”. Es diskutiert sich oft in der Auseinandersetzung mit Marx oder dem Marxismus. Mit anderem Wort ist diese Diskussion auch die Frage der philosophischen Interpretation des Marxismus. Daher werden wir den Inhalt der menschlichen Natur durch die heutigen deutschen Gedanken erhellen können. Meine Absicht ist die Entfaltung dieser Aufgabe, und die vorliegende Arbeit hat den einführenden Charakter.

Als Ausgangspunkt nehme ich die Kontroverse Landgrebe-Habermas. Diese Kontroverse zeigt die Möglichkeit der philosophischen Interpretation des Marxismus. Ihre Möglichkeit ist von Landgrebe ebenso entschieden bejaht worden wie das Recht aller bisherigen Marxismuskritik von Habermas mit dem Argument in Frage gestellt wurde, daß diese philosophisch gewesen sei und die von Marx intendierte Aufhebung von Philosophie unterschlagen habe. Nach Habermas führt eine philosophische Interpretation des Marxismus das Moment auf einen Standpunkt zurück, der durch Marx grundsätzlich überwunden worden sei.

Marx versteht die bisherige Geschichte der Menschheit als die der Entfremdung. Die Kategorie der Entfremdung beruht auf der Lehre neuzeitlichen Naturrechts. Der Gedanke des neuzeitlichen Naturrechts ist nicht hermeneutisch, sondern unhistorisch, abstrakt. Aber der Begriff von Marx ist historisch. Die Geschichte ist nicht nur die des Selbstverlusts, sondern auch macht die Bedingungen der Selbstverwirklichung der Menschen.

Um die menschliche Natur zu erhellen, müssen wir diesen Entwurf von Marx erhalten. Indem wir an dem ursprünglichen Gedanken von Marx festhalten, können wir den Schlüssel finden, der den Inhalt der menschlichen Natur erklärt. So müssen wir ihren Inhalt unter den neuen historischen Bedingungen erforschen. Das waren die Leistungen von G. Lukács und E. Bloch in den zwanziger Jahren.

(1)

かつて啓蒙主義の先駆者たちは、中世的蒙昧をはらいのけて、「近代的人間観」の獲得の営みに腐心した。それはホッブスに典型的に見られるような「自然権」を媒介とした近代的主体像の発掘に他ならない。かれらは自然科学、自然法学、自然神学といった、いわば理性に裏打ちされた諸観念にもとづいて新しい人間像を作りあげた。それはまさに素朴ではあるが、もっとも基本的な人間的・自然・人間性一を根底としていた。人間的・自然の解放とその十全な展開こそが、動物的自然から人間を本質的に区分し、世界の支配者、「魔術からの解放」者として人間を位置づけ、人間の全的發展を保障するものであった。

時が流れ、二百年が過ぎた。《世紀末》の今日、啓蒙期が期待した人間的・自然の解放はなしとげられたのであろうか。否である。人間的・自然は解放されるどころか、「高度産業社会」といわれる国家独占資本主義社会の中で、それは芽をつみとられ、貧困化の過程をとっている。街頭に満ちあふれている、「自由」を謳歌しているかの如き「風俗的自然」も、その内実は独占資本の「依存効果」に踊らされる人間の欲望の風化した姿に他ならない。独占資本は人間の総体をも含めて「市場」となし、日々、人間の内面、外面を搾取し続ける。様々な箇所で、様々な時に語られる「疎外」という単語は、実にこうした現実の統一的な表現形態にすぎない。人間的・自然は独占資本のあくなき搾取のもとで、息たえようとしている。

近代文明があげそめた啓蒙期は、自然科学に絶大なる信頼感を寄せた。それは中世の宗教的社

会を批判する武器としては、十分な効果をもった。しかし現代文明は——それが文明であるというそれだけの理由からではないが——いわば「第二の自然」として人間に対立している。「第二の自然」は巨大な機構、機械として、人間的自然を浸蝕し、人間を物神崇拜へと駆りたてる。近代合理主義の遺産である自然科学主義、実証主義は、この事態を促進している。「第二の自然」は人間的自然ばかりでなく、自然そのものを破壊している。国家独占資本主義での「第二の自然」は自然破壊と人間性の喪失に向けて邁進している。

人間的自然の破壊過程が現代の特徴であるとすれば、我々は如何にしてこの状況から脱することができるのであろうか。これまで多くの社会学者はこの難問にいどんできた。アドルノ、ホルクハイマーからシュミット、ハバーマスに至る新旧のフランクフルト学派の主題もこの一点に収斂できる。その多くは、マルクスないしはマルクス主義との対決の中で、言い換えればマルクスの哲学的解釈の中で、論じられてきている。我々はまだみぬ人間的自然の完成態を探りだし、現実化するには、こうした先達の業績を垣間みることによって、初めてなしとげえるであろう。我々はここでは、巨大な文明に立ち向かう強靱な主体の依り所となる人間的自然の内実化を、現代ドイツ思想に肉薄する作業を通じて取り込もうとするものである。それは、如何に困難で遠い目標であれ、人間的自然の確立の方途を求め歩くことが、現代人の緊急の課題となっているからでもある。我々は、この要請に答える為の論議を順次展開していくものであるが、ここでこの作業はその序論的性格をもつものである。(1)

(2)

我々は、まずマルクスないしはマルクス主義をめぐる哲学的論争、他言すればマルクス主義の哲学的解釈の可能性の問題を、1960年代に行なわれたルドヴィヒ・ラントグレーベ＝ユルゲン・ハバーマス論争を考察することによって開始しよう。(2)

ラントグレーベはマルクス主義の哲学的解釈の可能性を強調している。一方ハバーマスは、従来のマルクス主義批判は全て、それらが「哲学的」であり、マルクスが志向した哲学止揚を隠匿してきたという論証によって疑問を投げかける。ラントグレーベはマルクス主義の哲学的解釈の正当性と必然性の論拠を以下の様に基礎づけようとする。

1. マルクスはヘーゲルとの対決の中で、自己の理論を発展させた。それ故、マルクスはこのことによって、即ちその哲学上の出自によって制約されている。

2. 人間の実践形態を根本的に規定しているものは、各人がもつある原理である。その原理によって「何を如何に」行為すべきかが示され、確定される。ひとが何らかを行為するにあたって、かかる原理が各人の内面に浸透し、行為の「構造」「方向」を予決するのである。マルクス主義においては、哲学がこの様な実践の「予決状況」の位置をもつ。

3. しかし理論的に予め形成された地平によって制約されるということが、直ちに人間の全ての行為を構成するものではない。このことは形而上学とその伝統の範囲にのみ有効となるのであって、マルクスといえども、彼の形而上学破壊の企図にあたっては、形而上学とその伝統に依存

している。

ラントグレーベの主張から引きだされる重要な結論は、マルクス主義との対決においては、形而上学が、マルクス主義自身のもつ形而上学的本質の故に、可能な批判的立脚点としては陳腐なものとなっているということである。確かにマルクス主義は多分に形而上学に依存しており、マルクス主義に抗する決定的論拠をそこから導出することは可能ではある。しかし、形而上学の本質に拘泥された可能圏を凌駕する思考のみが、マルクス主義を本質的に批判、克服しうる基本的眺望図を獲得しうる。このラントグレーベ的立場からすれば、マルクス主義はその形而上学的本質により座折する。ラントグレーベによれば、「全体主義的支配形式」へのマルクス主義自身の後退という現事態は、思考に対する形而上学支配の絆を切断する恰好の時期となる。ラントグレーベは哲学を現実化するというマルクス主義の要請に重点を置いてはいるが、同時に哲学を現実化する実践というマルクス主義思考の中に収められている哲学止揚の意志モメントが単略化されている。

ラントグレーベが哲学の現実化における哲学止揚の課題を誤認したのに反して、ハバーマスはマルクス主義において意欲され、追求された哲学止揚の問題を念頭に置いている。ハバーマスによればマルクス主義の哲学的解釈は、マルクスによって根本的に克服された観点に立ち戻ることである。その際、彼は歴史進歩の経験に照らして、マルクス主義を革新しようとする。彼がそのことを行なうのは、マルクス自身に対する原理的批判及びマルクス主義理論の本質部分の放棄によってである。それはマルクス主義の現実には原理的にはいまだ着手されていない、というテーゼに結実している。ハバーマスは従来のマルクス主義の理論形態を踏破することを通じて、その理論の意味と性格を新たに定式化せんとする。その場合、彼は理論に付与される課題を如何なるものと規定するのであろうか。「それは経験的に保障された問題であると同時に、》最後の《哲学一般という形態をとった社会理論の問題である。」⁽³⁾

ハバーマスがマルクス主義理論の特殊性格として抽出するものは、歴史哲学でありたいという意図である。それはヴィコー（Vico）以後追求されてきた近代歴史哲学の潮流の一環をなしているが、同時に経験的に確証されんとする要求、即ち社会諸科学の諸規準をも満たしうるという要求からみて、近代歴史哲学それ自体とは一線を画すものである。「マルクス主義は経験的に基礎づけられねばならない」というテーゼは、換言すれば、革命の客観的諸条件の確定は経験的統制に従うべきであるということになるのであるが、ハバーマスはこれを、マルクス主義の歴史的経験から照らしてみても、マルクス自身の基本的誤謬を指摘することによって、立証せんとする。マルクスの誤認は一ハバーマスによれば一人間の自己疎外からの歴史的解放をプロレタリアートに託しようとした点にある。「階級対立の社会という実在的非真理の、一言で言えば疎外は、実践的に止揚されるべきものであり、かつ止揚されうるものである」というマルクス主義のテーゼは二重の統制をうける。このような止揚の可能性の客観的条件が歴史的、社会学的に証明されるならば、このテーゼは正しいテーゼである。これらの客観的条件に主体的条件が付け加わり、批判的準備を経て止揚が実践的に完遂されるならば、このテーゼは真なるテーゼである。革命の客観的可能性の有無に関しては科学のみが決定権をもつが、それは革命の未発や誤まった実

現にまでは及ばない。」⁽⁴⁾

ハバーマスはフランクフルト学派に共通する意識にもとづいて理論化を図っている。歴史的に哲学止揚を実現せんとする社会科学者は、社会変革の客観的成熟度について現代社会を分析し、社会過程に占める位置から変革能力のある、かつその意志をもつ主体を追求する。この主体が、先進産業社会の現況からは見出しえないとすれば、当然この主体を、理論を媒介にして、即ち「啓蒙」によって始めて生み出すという課題が提起される。しかし、マルクス主義理論の構造と課題のこの転変はマルクスの再興を意味するものではなく、ヘーゲル左派の立場の復権を唱えるものである。⁽⁵⁾ ハバーマスの師であるアドルノの「美学」や「否定の弁証法」への回避も、正統マルクス主義の見地からみれば、経済学の放棄という点からも無定見とみなされる。アドルノの「ルソー主義」⁽⁶⁾ は、革命実践の主体喪失という状況認識に対応している。又こうしたことからハバーマスは、経験社会科学並びに精神史的解釈学を「最後の哲学」⁽⁷⁾ としてのマルクス主義理論の中へ統括する要請を主張し、その為の実証主義との科学方法論論争を行なうのである。この論争は形式主義的な様相を帯びてはいるが、ハバーマスの意図は次の一点にある。即ち実証主義が、社会の全体的変革の客観的諸条件を経験的、科学的に確定する可能性に疑問をはさむことに反論することにある。

確かに解釈学的方法を現代社会科学の基礎連関へ統合することは、科学概念の解釈の変更を呼び起こしはするが、それが直ちに、革命的行為という目的から求められる諸条件の客観的性格を保障しうる可能性は定かでない。それ故、ハバーマスの解釈学理解がガーダマーの「真理と方法」にのみ制限され、ブルトマン、エベリンク、フックス、ベッティ等のそれがまったく無視されるという一面性を有しており、ハバーマスが目指した経験科学の一般的方法論と精神科学の一般的解釈学との二元論の克服は、新たな「了解点のない並列関係」を生みだしているという批判がなされる。⁽⁷⁾

(3)

哲学的マルクス主義解釈をめぐる ラントグレーベ＝ハバーマス論争から我々は必然的にマルクスの出発点に立ち戻らざるをえない。しばしば指摘される様に、哲学止揚による哲学の実現というマルクスの概念は必ずしも明確ではない。マルクスは虚妄な神学としてフォイエルバッハの哲学を承認することにより哲学を受容する。彼にとっては「哲学」は生産力と生産関係の矛盾に基礎を置く疎外の省察である。「哲学」はそれ自身とその対象の真の発生への洞察を欠くことから、疎外のポジティブな側面を一面的に評価し、疎外の中に展開されるネガティブiteitに眼をふさぐ。

マルクスは語る。「ヘーゲルは近代国民経済学の立場にたっている。彼は労働を人間の自己確認の本質として把握する。彼は労働の肯定的側面のみに眼を注ぎ、その否定的側面をみない。労働は外化内での、あるいは外化された人間としての、人間の対自的生成である。ヘーゲルが知り、承認する労働は抽象的、精神的なものである。従って一般に哲学の本質を形成しているも

の、即ち自己認知的人間の外化、あるいは思考されながらも外化される科学——これをヘーゲルは哲学の本質と把握する。それ故彼は先行する哲学の個々の契機を総括し、彼の哲学を哲学として叙述することができる。」⁽⁸⁾

ヘーゲルは近代国民経済学の立場をとる。国民経済学の発展が哲学の生成、存在、消滅を決定する。近代経済学の立場とは、生産性の立場である。社会的富は労働即ち生産に依拠している。この観点からヘーゲルは哲学者として何を営むのであろうか。彼の哲学的営為は、抽象的自然法的に考察されてきた自然概念の硬直性を歴史過程の力動の中へ組み込み、人間の類的自然に対立する、対象化としての社会を概念把握した点にある。しかしヘーゲルは疎外を抽象的、観念的に止揚するだけであり、現実実践的に止揚することを求めない。ヘーゲル哲学のモメントとしてマルクスの思惟の中へ浸潤し、それによってフォイエルバッハとはマルクスが区別されるものは、労働する人間の自己産出過程としてこれまでの歴史のポジティブテート洞察することである。外化された労働の中で生産される富、物化され対象化された自然が我物とされることができる。疎外の肯定性の承認は、資本主義社会が世界史的になった解放として疎外を止揚する肯定的、客観的条件を示唆している。しかし資本主義の発達はある一つの客観的条件にすぎない。他方この客観的条件を利用する主観は、社会的富の生産者でありながらも、物質的、精神的貧困化——トータルな貧困化——を蒙っている労働者階級である。マルクスにおいては、疎外概念の中核は経済的に把握される貧困化である。

マルクスは生産主体による疎外された労働の革命的先有に類の解放史の完成予測をみいだす。それはこれまでの全歴史の止揚を意味するばかりでなく、既存の全歴史を「前史(Vorgeschichte)」に零落させるものである。「人間の自己疎外である私的所有の肯定的止揚としての、それ故人間による人間のための人間的本質の現実的占有としての、従って又これまでの発展の全富の内部で生成した、社会的即ち人間的人間としての人間自身の完全で意識的な環帰としての共産主義、この共産主義は完全な自然主義としてヒューマニズムであり、完全なヒューマニズムとして自然主義である。それは人間と自然との、人間と人間との斗争の真の止揚であり、実在と本質、対象にと自己確証、自由と必然、個人と類との間の斗争の真の止揚である。」⁽⁹⁾

したがってマルクス主義は、これまで歴史の客体に甘んじてきた人間主体の位置を逆転させて、人間が意識的に歴史を統御する「実践の理論」を確保せねばならない。悲惨な疎外史を、アドルノの言葉で言えば《das Grauen》を人間的充実の歴史へ転化させるという思考は、これまでの全歴史を、対象化された疎外された労働として、未止揚の自然として、又その自然に基礎をもつ支配の無意識的過程として考えることにより成立する。

我々はここで人間的自然の内実とその実現の方途を問う手段として哲学的・人間学的マルクス主義解釈の論議を問題としているのであるが、その場合以下の4項目にわたるマルクス主義理論の諸要素をその内在的尺度にする必要があろう。

1. これまでの全歴史は人間の自己疎外の歴史である。マルクスの前提した疎外のカテゴリーは近代の自然法理論に基づいている。彼は国民経済学と、その中に前提とされている近代自然法思想の伝統に直接にそれを結びつけている。しかし近代自然法思想は歴史的、解釈学的ではな

く、非歴史的、抽象的である。それは厳密自然科学の方法イデオールに志向する方法によって規定されている。自然科学者は自然をエレメントへ分解し、再びそれを、現象した自然連関を通じてではなく、「方法の法則」によって統合化するのであるが、近代自然法思想もその典型に倣う。それ故「人間」の概念は抽象化の道で獲得される。したがってそこでは非歴史的に考えられた人間という「自然」の仮説的構成が重要視される。そこでの目的は、「方法の法則」にならって創られた仮説上の概念と人間とを一致させることにある。国家に焦点があてられる「契約説」との関連でみれば、疎外概念は決定的な意味をもつ。国家が契約から成立すると考えることは、人間が自らの「自然」を放棄するということを意味する。それは原理的にはホッブスによって説かれ、ルソーによってトータルな主張となり、歴史は疎外の歴史、即ち「自然からの解放」の結果と理解される。だが歴史は近代自然法思想の抽象的、非歴史的な性格とは異なり、人間の自己喪失の歴史であると同時に、人間の自己実現の条件を生み出す歴史でもある。ヘーゲルとの対決の中で我物とされた弁証法からマルクスは資本主義のかかる「肯定的評価」を引き出すのである。疎外の歴史は人間の即自的歴史であり、向自的のそれではない。しかし即自はその中に向自を含んでおり、自己自身とその世界の産出を孕んでいる。⁽¹⁰⁾

2. 人間を支配する強力な道具となった事物の革命的占取の諸条件は、マルクスにおいては、歴史的現在に与えられている。疎外の歴史はその展開過程の中で、労働者階級の形成を通じて自己自身の止揚と止揚主体を生み出した。この主体は極端な物化の世界の中で、自ら物化した客体であることを意識し、真の主体に我を取り戻すために活動する。それがマルクス主義においては、「政治経済革命」の目的となる。

3. 2) から直接に導きだされるように、「革命」概念を如何に考えようとも、純粹マルクス主義的概念によれば、革命の主体は経済的に制約された疎外を止揚する労働者階級である。これ以外に疎外史を止揚する階級は存在しない。

4. 革命が生み出す未来状況は現状の否定によって規定される。全ゆる疎外を固定化したシステムは資本主義的に組織された社会の止揚とともに原理上消失する。即ち生産手段の私的所有、階級支配の手段としての国家、ブルジョア的抑圧的道德等が原理的には消失する。未来状況は労働のネガティブな側面を否定するとともに、私的所有と階級構造を克服した社会における労働のポジティブな役割によって特徴づけられる。

だが未来社会の労働形態とその必然性に関する立言はマルクスにとっては決して一義的ではない。一体労働の性格は変化するのであろうか。労働は全体として消失するのであろうか。

労働はもはや人間の生活を維持する単なる手段とはならない。労働は人間そのものにとって最初の、根源的な「生の欲求」となるであろう。労働の強制的、疎外的性格はなくなる。人間は手段に対する如くには労働生産物に対して振るまわれない。彼は生産物に固有の質のために振るまう。こうして労働はロマン主義的、美学的とも言える性格を獲得することになる。

それにもかかわらず後期マルクスは、必然の王国の彼岸に、したがって社会的に必然的な労働の領域の彼岸に自由の王国を想定した。これは現代産業社会のテクノロジー構造を考慮したものに違いはない。当然義務的、強制的労働——「課せられた労働」——の圧迫からの解放が、マル

クス主義の「希望の原理」(E・ブロッホ)である。しかし人間の本質が労働の中に見出され、労働一般の廃止(=失業)が疎外のきわめてラディカルな形態である限り、マルクーゼ的な人間学的マルクス主義解釈には難点があるといえよう。⁽¹¹⁾

「弁証法を完遂することは、弁証法を止揚することである。即ち人間の手によって創造されたすべてのものが実際に人間たちの処理に委ねられるようになるときにはじめて、真に処理不可能なものごとが解放されて、虚偽の管理の及びえぬところで守られる。」⁽¹²⁾ こうハバーマスが語る時、彼の論旨は当を得ていると言える。マルクスの理念は疎外された労働形態と管理された世界の全特徴を解体し、歴史における新しい労働関係を建設することにある。それはよりポジティブに労働を我物とし、生の充溢を開花することである。

マルクスは語る。「全ゆる人間性の抽象、人間性の仮象の抽象化は労働者階級の形成において実践的に完遂されたが故に、又人間は労働者階級において自己自身を喪失したと同時に、この喪失の理論的意識を獲得したことによって、この非人間性に対する怒りへと駆り立てられるが故に、それ故にこそ労働者階級は自己自身を解放することができ、又そうせねばならない。しかし自らの生活諸条件を止揚せずしては、自らを解放することはできない。彼の状況と一致している今日の社会の非人間的な生活諸条件を全て止揚せずしては、自己自身の生活諸条件を止揚することはできない。」⁽¹³⁾ これに対しハバーマスは、しかしながら、異論をはさむ。「人類の意識の完成がもっとも卑しめられ飢餓と暗黒の極にある個々人の頭の中で起こるという見方は、疑わしい。人類の自己意識は肉体的搾取のためにすべての意識的努力が始めから社会的偶然にゆだねられている階級の内部で、悲惨の非真理に対する反応として生ずるよりも、むしろもともと高い意識水準へ引き上げられている社会の内部で、富の非真理に対する反応として達成されるという方が、自然ではあるまいか。現にあるものを可能であるものにてらして判定するように人民大衆を動かす可能条件は、悲惨のさなかでの極貧状態よりも、富裕のさなかでの極貧状態によって作られるのではあるまいか。まぎれもない貧困の弁証法よりも、偽りの豊饒さの弁証法の方が、非合理的な支配に対する反省へ人々を導くのではあるまいか。」⁽¹⁴⁾

この間は至当ではあるが、マルクスの一面的理解にもとづいており、結果的にマルクス理論の中核を投棄することになる。労働者階級は「極貧状態」にあるが故に、あらゆる生産手段を奪われているが故に、ただそれだけで革命を遂行する運命に位置づけられるのではない。労働者の内部に人間存在の現実喪失の真理がいわば肉化されているが故に、革命遂行使命が付与されるのである。マルクスにとっては、労働者階級は現実に対するあらゆる幻想を失い、これまでの世界秩序を、その実存において、実践的に解消するが故に、「真の人間」なのである。社会変革の洞察は理論を媒介することによって生みだされる、別の言い方をすれば「啓蒙」が実践的にならねばならない、ということがマルクスの要求ではなく、マルクスが出発点としたのは、「啓蒙」はプロレタリアートの実存そのもので成立しているということである。宗教、哲学、倫理、平等、等々の無力性の証明は、プロレタリアートの存在というただこの一点で、実践的に社会的になされる。

人間的な自然の完成という目的をもった「革命的実践」というマルクスの「投企」は堅持されな

なければならない。何故ならばそのことによって種々のマルクス主義批判との対決点が明白にされるからである。しかしマルクス主義の基本的構造を革新する志みはすべて、マルクス主義の実践的現実的形態から受けた印象によって誘引されている。その場合、我々は、批判がマルクスのいかなる概念から導出されたのか、又それは歴史的経験にどれほど従うのか、ということをお問わねばならない。だが、我々の論議で重要となることは、革命的自己解放行為そのものではなく、その批判が如何なる論理構造を有し、その結果人間的自然とその充実を如何に想起しているかということである。そのために我々はマルクスの根源的思考を概略ながらも訪ねたのである。西洋的合理主義の嫡子とも言われるファシズム⁽¹⁵⁾を体験した現代、新しい歴史的諸条件のもとで、マルクスの根源的で真の意味の希求がいかにアクチュアル化されるであろうか。これに答えるには、我々は二十年代のルカーチ、ブロッホの営為をお問わねばならない。

注

- (1) 序論的性格をもつ本論では、ラントグレーベ＝ハバーマス論争を中心にして我々が展開していかねばならない問題の基本線を辿ろうとするものである。その場合、当然ながらマルクスの立場の概括が必要となるが、その要請を直接にここでは課題としている。
我々が以後順次展開して行こうとするものは主題的には二十年代以降現代に至るまでの代表的なドイツ現代思想に制限される。その直接的対象は、G・ルカーチ、E・ブロッホ、M・ホルクハイマー、Th・アドルノ、J・ハバーマス、A・シュミット、O・ネークト、H・マルクーゼ、A・ゲーレン等の理論である。
- (2) Habermas, Jürgen: Theorie und Praxis 1963 S. 279ff
Landgrebe, Ludwig: Das Problem der Dialektik, Marxismusstudien, 3. Folge. 1960.
- (3) Habermas: a. a. O., S. 301
- (4) Habermas: a. a. O., S. 322
- (5) この評価はドイツ民主共和国における「オーソドックスなマルクス主義」からする一般的性格づけである。
Die „Frankfurter Schule“ im Lichte des Marxismus, hrsg. von. R. Steigerwald u. a. を参照。
- (6) Rohrmoser, Günter: Emanzipation und Freiheit.
- (7) Geuss, Arthur: Die Hermeneutik und die Sozialwissenschaften, in: „Soziale Welt“ 20. Jg. H. 2 S. 214—215
- (8) Marx, Karl: Die Frühschriften, hrsg. v. S. Landshut S. 269—270
- (9) Marx: a. a. O., S. 235
- (10) マルクスの「自然」概念については、アルフレート・シュミットの業績を論じる際に、もっと詳細に立ち入る必要がある。Schmidt, Alfred: Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx
- (11) マルクーゼは、フーリエが唱えた「労働の廃止」に積極的に答えるための作業が続けているが、その時に重視されているのは生物学的次元での欲求である。なおマルクーゼに対する批判として拙稿

「管理社会論」（講座「現代の社会学」第Ⅰ巻所収）がある。

(12) Habermas : a. a. O., S. 320

(13) Marx : a. a. O., S. 235

(14) Habermas : a. a. O., S. 333

(15) ファシズムの原因を考える場合、二つの思想潮流がある。その一つは近代西洋合理主義がファシズムを生みだすという立場である。これはアドルノ、ホルクハイマー等のフランクフルト学派の基調になっている。それに反しルカーチ的立場はファシズムを理性に対する非理性の勝利と解する。我々が人間的自然を考える時、当然現代合理主義の内実を問わねばならないが、それにあたってもっとも参考にすべきものは、ルカーチ的立場よりも、むしろフランクフルト学派の発想であろう。Th. W. Adorno u. M. Horkheimer : Dialektik der Aufklärung, G. Lukács : Zerstörung der Vernunft.